

相にすぎなかったかを痛感させられた。学生諸君にも相当難解であったようであるが、彼の所説を私の中で明確に位置づけるために、某出版社からの需めに応じて今度その翻訳を出版することにした。

Heiderによって播かれた種子のうち、彼にとってより重要なのはいわゆる balance theory のそれではな

く, attribution theory のそれであったと思う。これを少し体系的に学習したいと思い、本年度の大学院の授業で取りあげることにした。院生諸君は相当アゴを出しているようであるが、私はいまその柔軟な思考性に魅かれているところである。

## 課 題 お よ び 現 況 水 野 欽 司

一年は短いもので、雑件に追い廻されているうちに、あっさり過ぎ去ってしまった……と先回この欄に書いたが、今回も同じことを、しかも今度は過ぎた五年余の年月に対して、書かなければならない。

あわただしかった五年を回顧して、要するに、私は統計的データ処理というものの内容と機能を、もっぱらデータ本位の立場と実践的価値を重んずる立場とから、探し求めて来たように思う。それゆえに、いたずらに解析方法の“美学”を追いかける風潮に反対する一方、いわゆる「雨が降れば天気かわるい」式の内容乏しき理論研究での利用を排斥した来た。このことは、いろいろね機

会に学生諸君にもよく語って来たことである。

実際に自分が果し得たものは余りにも小さいが、いろいろな試みを通じてデータ解析もっている問題の輪郭にわずかながら触れることができたことに満足している。この五年間に得たものを土台にして、今後はこれらを具体的な成果に結びつける努力を重ねて行きたいと思う。

将来への課題は大きく重くなるばかりであるが、紀要のこの欄にも別れを告げるときが来てしまった。しかし私は変ることなく、たとえその歩みは遅くとも現在の延長線上を生き続けるであろう。さよなら。